
大きな猫のバナハット

えだまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな猫のバナハット

【Nコード】

N2176Y

【作者名】

えだまめ

【あらすじ】

時代は1980年頃のフランス。
両親をなくした僕は働き口を探していた。
そんな中見つけた働き口ーcafe banhatーには優しい”マスター”と絵描きを目指す女の子の”エナ”そして大きな白猫の”バナハット”がいた。僕はそのカフェで働きエナと絵を描く中でバナハットに連れられいくつもの”大冒険”をすることになっていく！

プロローグ

僕は大きな猫の後を追って歩いていた。

真っ白で太っていて足なんてこんなに短い猫だ。

自分でもなんで猫の後なんて追っていたのか分からない、ただあのときの僕は何も考えていなかったのだ。

猫は民家と喫茶店の小さな隙間へと消えて行った。

僕が後を追えるのはここまでだ。

僕は右手の喫茶店の看板を見た、『cafe-banhat』そう書かれている。これがこの店の名前か。

僕にはもう後がない、ダメでもともとだと思ってここにも入ってみるしかないだろう。僕は迷うことなく店の扉をくぐった。

「いらっしやいませ、お好きなどころへどうぞ」

口ひげの印象的なマスターは僕に向かって微笑み言った。

店の中には僕以外に客はいないようだ、コーヒーと紅茶の混ざった優美な匂いが僕の鼻をくすぐった。

僕はマスターの正面のカウンターに座った。

「あの」

「はい、なんででしょう？」

「ここって働き手とか募集してませんか？」

僕はさっそく本題に入った。

「そうですね・・・」

マスターは少し考えて言った。

「してませんねえ」

「よかったら雇って欲しいんですけど、僕」

マスターは迷っているようだ、頑張ればいけるかもしれない、そう思った。

「とりあえず何かいかがですか？」

「それじゃあアップルティーで」

「アップルティーですか、分かりました」

少しすると優しく甘い香りのアップルティーが綺麗なブドウの葉の柄の受け皿に乗って出てきた。

「初めてのお客様でアップルティーなんて珍しいですね」

「好きなんですよ、リンゴ」

「そうでしたか」

「今はもう死んでしまっていないけれど、お父さんがリンゴ農家でお母さんがそのリンゴを使って作ってくれるアップルパイとアップルティーがおいしくって」

このときマスターが何と返したかは覚えていないが、それから半時間経った頃だったと思う。

「お客様は働き口をお探しで？」

「えっと、そうですね、両親がいつぺんに死んでしまったもので親戚もいないから働かないと」

「そうでしたか・・・」

お気の毒様です、そう言ってマスターと僕はまた黙り込んだ。

今度は僕が先に口を開いた。

「仕事を覚えるのは早い方なんです」

「・・・・・・」

僕は今、乾ききらない絵の具の匂いのする小さな屋根裏部屋にいる。

マスターはあの後僕を連れて店の奥へ入った。

僕たちはコーヒー豆や茶葉の置かれている物置を通って埃っぽい小さな階段を上った。階段を上がった先は天上が低くほんの1メートルほどの短い廊下の先に腰を折らなければ入れないような小さな扉があった。

扉をくぐるとそこは屋根裏部屋になっていて、西側と東側の両方に小さな部屋には不釣り合いなやや大きめの窓と南側の天上には申し

訳程度の小さな天窓があった。部屋の真ん中には丸いウッドテーブルがありそれを二つのイスが挟んでいる。？き出しの梁には1982年の真新しいカレンダーとたくさんの絵が貼ってあり、天窓の下にはキャンバスが置かれている。

その絵はどれも乾ききっていないようで独特の匂いが部屋を満たしている。

マスターは僕をこのイスに座らせた後一人一階へと降りて行った。僕はもう一度絵を眺めた。

パジャマ姿の男の子や女の子たちが眠たそうに瞼をこすりながら一列になって歩いている。列の先頭には大きな白い猫がトランペットを吹いて歩いている。どうやらこの猫に連れられてどこかへ行くシーンのようだ。

その隣の絵には猫を囲んで踊る子供たちの姿があった。猫は輪の真ん中でトランペットを吹いて踊っていた。

さらに隣の絵を見ると今度は子供たちが涙を流す猫を慰めている。ボロボロと涙をこぼす猫の手にトランペットはない。そしてその絵の左隅にはトランペットを持って笑うゴブリンの姿があった。

「うなーご」

突然背後で猫の鳴き声が出て、振り返るとあのときの猫がいた。

正面からみるとまるまるとした頬に細いキレ目がついていてお世辞にもかわいいとは言えないような不思議な哀愁漂う顔をしている。そいつはずんずんと僕の横まで歩み寄って来て短い足からは想像もできないほど軽やかに僕のふとももに飛び乗った。

「っ重」

「うなーご」

かわいい気のない鳴き声をあげるとそいつは僕の脚の上で丸くなった。

「お待たせしました」

今度はマスターの声がして振り向くと紅茶をふたカップ持ったマスターとその横には16ほどの短いブロンドの髪の女の子の姿があった。

女の子は物置でみたコーヒー豆が入っていたのと同じ木箱を持っていてそれをテーブルの横に置くとそこへ座った。

マスターは”もう一杯どうぞ”と僕にアップルティーを差し出し僕の向かい側に座った。

もう一杯のマスターが持っているカップにはココアが入っていて少女はマスターからそれを受け取ると嬉しそうに口をつけた。

「おやおや、バナハットと仲良くなるなんてどんな魔法を使ったんですか？」

マスターはもの珍しそうな顔で聞いてきた。

「バナハット？ああ、この猫の名前ですか？特に何もしてませんが」

”そうですか”とマスターが言うとう度は少女が口を開いた。

「バナハットはね、人見知りってわけじゃないんだけれどめったに人に懐かないのよ、だからバナハットがそんなに安心した顔であなたの足の上で丸くなっているなんてきつとあなたには何かあるんだわ」

僕は脚の上で丸くなっているバナハットと呼ばれた猫の顔を覗き込んだ。

やっぱりブサイクだ。

「わたしはエナよ、あなたは？」

「僕の名前はニック、ニック・ユンカース」

「ね、雇ってあげなよ！きつと何か楽しいことがあるわ！」

少女は目を輝かせてマスターに言った。少女のココアはいつの間にかなくなっていた。

「うーん・・・ニックさんは今どこに住んでいらっしゃるんですか？」

「”さん”なんてそんな、もっと適当な呼び方でいいですよ。あ

と、今はその日その日のバイトでお金を稼いでその金でその日の宿を取って暮らしてます」

「じゃあニックくんって呼びますね、ニックくんは今いくつですか？」

「来月に17になります」

「それじゃあ大変でしょう」

「住むところならうちの二階の部屋が余ってるじゃない！そこ使わせてあげたらいいわ！」

「いえいえ、そんな！住むところまで用意していただくなんて結構ですよ！」

「いやいいんです、エナも気に入ったみたいだしましてバナハットとお友達になれるくらいですから、部屋くらい貸しますよ。ただその代わりしつかり働いてもらいますよ」

「あ、ありがとうございます！！！」

こうして僕は運よく働き口と住まいを手に入れた。

始まりの香り

エナはさっそく僕を家へ案内するとマスターに伝え僕の手を引き店を出た。

「ちよつと寄り道してもいい？」

僕の手は離さないまま振り返ることなくそう聞いた。

「僕はかまわないよ」

「よかった、ちょうど青の絵の具が切れてたのよ」

絵の具？エナは絵を描くのか、そうか、あの部屋の絵はエナが描いたものなんだろうな。僕はすぐにエナに聞いた。

「エナは絵を描くの？部屋にあった絵はエナが？」

”そうよ”と軽く言うのと少し間を空けてエナは続けた。

「わたしね絵を描くのが好きなの、このまま絵を描き続けてそのうちにはその絵で生活しようと決めているの」

「おじいさんは？おじいさんの喫茶店で働く気はないの？」

「おじいさん？ああ、ジョージさんのことね、よく言われるけどわたしとジョージさんは血は繋がってないのよ。だってわたしのフルネームはエナ・エイラで、さっきは自己紹介し忘れてたみたいだけどジョージさんはジョージ・ブルモアって言うのよ」

なんだか悪いことを聞いてしまったような気がして僕は申し訳なく思った。

「ジョージさんは孤児だったわたしを拾ってくれたの、感謝しているわ」

エナの顔は見えなかったがエナは少し泣いていたかもしれない。僕はそれを握られた手の平から感じた。

それから僕らは人通りの多い大通りへ入って少し歩き、また小さな路地へ入った。路地を少し行くと道の右手に小さな画材店が現れた。

”ここよ” そう言うとエナはぱつと僕の手を離した。強く握られていたわけではないが長い間握られていたからだろうか、僕の手にはエナの小さな手の跡がついていた。

ーカランコロンカランー

扉の鐘は乾いた音で僕らの入店を知らせた。

「ダムおじさん！いるんでしょ？青い絵の具が欲しいんだけど！」
エナは店の奥に向かって叫んだ。

埃っぽいような、油絵の具の乾いた匂いのような、はたまた額縁なんかの木の匂いだろうか、不思議な匂いのするところだった。

エナが声を上げてからすぐに店の奥からベレー帽を被った190程の大男が現れた。

男はエナの前まで来ると僕を一瞥し両手を広げエナに言った。

「ボーイフレンドがいるなら言ってくれなきゃ！俺ってばお前さんがこんなにちいちゃい頃から知ってたんだよ！？」

「そんなんじゃないわよ！言ったでしょ？わたしの王子様はわたししがピンチになって初めて現れるの！」

「なんだなんだ、もう16だろ？まーだそんなこと言ってんのか！」

男は腰に両手をつけてガハハと笑った。僕は完全に蚊帳の外だ。

「おじさん言ったじゃない、いい絵描きってのは子供の心を持ち続けてるやつだって」

「そーいえばそんなこと言ったかもなあ？あーと、青の絵の具って言ったな？待ってな」

そういうと男は店の奥へ消えていった。

「ごめんなさい、ダムおじさんってああいう人だから」
エナは僕の方に向き直って軽く謝った。

「僕は少しも気にしてないよ」

そういうとエナは笑ってくれた。

「あの絵見て、あれダムおじさんがちょうど私と同じ年のときに描いた絵なのよ」

人差し指の先には壁に掛けられた大きな絵があった。

どこの港だろうか、大きな貿易船とそこから積荷を降ろす船員たち、魚を売る商人、それを買う老婆、隙をついて魚を奪おうと目論む野良猫、船の帆に止まり羽を休めるカモメ、真っ青な青空を反射させる大きな海原、僕の目に映った一枚の絵にはたくさんの物語が感じられた。

「わたしもあんな絵が描きたいわ」

その言葉は僕にかけられたものではなく、ふっと彼女の口からこぼれた本性だった。

「ほーら、あったぞ!」

おじさんはたくさん埃とクモの巣を体中にくっつけて帰ってきた。

「ちよつとどうしたのよ、絵の具を取ってくるだけでしょ?」

「まあこれを見てくれよ」

おじさんが自信満々に出したのは青い絵の具と立派なパレットだった。僕は絵は描かないし、ましてパレットの良し悪しなんて分からないしそれが何の木から出来ているかなんて想像もつかなかったが、僕にははつきりそれがすごいものだと分かった。

「絵の具しか頼んでないわ!」

「お前さんじゃねえ、そっちのボーイフレンドにだ」

使い方はエナに教えてもらいな、そう言っておじさんは僕にパレットを渡した。さっきの様子からは想像できないほどそのときは真面目な顔をしていた。

それはなんとというか、『絵描き』の顔だった。

「代金はいいいから、その代わり上達したらよ、あんたの絵、見せてくれな」

「ありがとうございます!」

僕は頭を下げた。

「ボーイフレンドじゃないって言ってるでしょ!」

エナがおじさんを怒鳴りつけた、顔を上げるとおじさんはもうさ

っきの顔に戻っていた。

「子供ってのは無邪気なんだよっ」

おじさんはガハハと笑いながら店の奥へ消えて行った。

「行きましょ」

エナの言うままに僕は店を出た。

エナはそこから家へ行くまでの間に少し意味深な話を僕にした。

「わたしね、おじさんみたいにいるんなものを見て描きたいわ。

でもね、なんだかんだ大好きなこの街からも離れたくないの。うちのバナハットを見たでしょ？わたしね、ときどき思うのよ『こんな気ままな猫がわたしをどこかへ連れて行ってくれないかな』って。

でもでも、やっぱりバナハットと二人じゃ怖いわ。」

家までの道の石畳は西日に照らされてオレンジ色をしていた。

エナに連れられて歩く道はなんだか違う世界のようにさえ感じられた。

「わたしあなたを見たときに思ったの、そしてバナハットの様子を見て確信したわ。あなたとならとっても楽しい冒険ができそう！それに三人もいれば怖くないわ！」

エナの話が終わったときちょうど僕は一軒の家の前についた。

「ここがエナとマスターの家？」

「そうよ！ようこそ我が家へ、そしておかえりなさい！」

花畑の時計塔

翌日マスターは”子供の頃からの友達のところへでかけてきますね、夕方には帰りますよ”と言い残し朝早くに出て行った。

時計の針は今11時を指している、エナは今絵を描いている。子供たちがトランペットを持ったゴブリンを囲んでお説教をしている絵だ。

エナは絵を描き始める前に僕に言い含めた。

”ダムおじさんはああ言ったけどわたしは絵の先生じゃないから『まずはこれを描きなさい』なんて言えないわ、とりあえず何でも好きなものを描いていいわよ。そしたらそれを見てアドバイスしてあげるわ”

はたして筆を握った経験もない僕が好きなものと言われてスラスラと描けるだろうか。考えるまでもない、なんでもいいが一番困る。困り果ててパレットに絵の具も出せないでいる僕を尻目にエナはどんだん色を乗せていった。

「うなーご」

振り返ると、バナハットは何か言いたげな顔をして立っていた。ような気がした。

「バナハットはいいね、行き詰るってことがなさそうだ。エナはどう思う？」

”そうね” エナは筆とパレットを机に置いて振り返った。

「うなーご」

今度はエナに何か言っているようだ。そんな気がした。

「今日のバナハットはおしゃべりだね」

「ねえ、何か言いたいんじゃないかしら？ そんな気しない？」

「そんな気って言われても、そうは見えるけど分からないでしょ？」

「・・・分かるわ、なんとなく。」

「なんとなくって、そんなの分からないのと変わらないよ」

「・・・ついて来て！」

エナは突然に立ち上がった。のを見るとバナハットは走り出した。
「早く！」

そう叫ぶと僕を待つことなくエナも走りだした。

僕が急いで机に筆とパレットを置いて部屋の入り口の方を見るともうエナの姿はなかった。一目散に部屋を飛び出し階段の下を覗くと走ってゆくエナのつむじが見えた。僕は階段をふたつ飛ばしで駆け下りた。そのときにふっとマーガレットの香りがしたのは開いた窓から吹き込んだ風にどこからか香りが乗って来たのだろう。

僕は階段を降りきって店を飛び出し、走って行くバナハットとエナの後ろ姿をはっきり捕えると必死で追いかけているが叫んだ。

「待ってよ！」

「早く早く！ずっとこれ waited たのよ！！」

訳も分からずに僕は走った。街行く人の何人に肩をぶつけたのかもいくつ角を曲がったかも分からない。僕たちは商店街を抜けて坂を登り民家の間を駆け抜け並木道へ飛び出し小道へと飛び込み息を荒げて走った。走って走って走るうちにだんだん花の匂いが近づいてくるのに気がついた。

「ねえ！なんか！花の！匂い！しない！？」

「ええ！するわ！」

そうして小道の角を曲がったときだった。

「！」

僕の足は自然と止まっていた。先に角を曲がっていたエナも驚き立ち止まっていた。バナハットは意外にも苦でもないといった顔で後ろ足をペロペロと舐めていた。

僕らは大きな花畑に出た。とんでもなく広い花畑。地平線の先までずーっと花が咲き誇っている花畑だ。

” はあ、はあ、” 僕らはしばらく息を落ちるけるのでやっとだった。ただその間も驚きは薄れることはなかった。花の香りが何より強いのが一番の驚きだった。

「街外れに、こんなところが、あったのね」

話せるまでに息の落ち着いたエナは言った。

「見てよあれ、時計塔よ、もう動いちやいないみたいだけれど」
花畑の真ん中には大きなレンガ造りの時計塔があった。そしてその時計塔からは花たちがきれいに避けてできたような小道ができている。それはまるで絵本か何かのページをくり抜いたような現実離れした美しさのある光景だった。ただここには絵では感じられないようなたくさんの花の香りが溢れていた。

「うなご」

バナハットは僕らが落ち着いたのを確認すると短く鳴いて花の小道を歩き出した。

「行きましょう」

僕らはゆっくりと時計塔へ伸びる小道を進んだ。

「この花、誰かが育てたのかな」

「そんなわけないでしょ、何百年かかると思ってるのよ」

” そうだよね” 僕が言うと” そうよ” とエナは自信なさそうに呟いた。こんなに大きいんだ、僕は誰かが育てたものだなんて少しも思っちゃんなかったが、確認せずにはいられなかった。それでもなきゃこんなものがあるはずないとどこかで思っていたからだ。エナの言葉に自信がなさそうだったのはきっと僕と同じ気持ちだったのだろう。

時計塔の下まで来ると中へ通じる戸が少し開いているのに気がついた。僕らは少しためらったがバナハットが中へ入って行くのを見て後に続いた。

「ちょっと！ここってば、いつからこんななのよ！」

げほげほとエナが咳き込んだのも無理はない、時計塔の中は埃だ

らけで僕らが床に足をつける度に風で埃が舞い上がった。

クモの巣もそこら中に張っていたがその家主の姿はなく糸は埃のせいで大きくたわんでいた。

僕は埃を吸い込んでしまいそうで、服の袖口を口に当てたまま話せずにいたがエナは

「時計塔って窓はないの！？こんな中にいたら死んじゃうわ！」
と窓を探して駆け回っていた。埃が余計に舞い上がって視界が霧のようになっていった。

僕は口を押さえながらも片手で目の前の埃たちを払いながら時計塔の螺旋階段を登った。

時計塔の機関部、僕はそこまで来ると大きな歯車の間を縫うように作られている通路の先に光がこぼれているのを見つけた。
うつすら見える光に通路を進むと錆びたドアノブの扉があった。
鍵はついていないらしい、ドアの隙間から光が漏れている。

ドアノブは錆びついて回らなかったので思い切り引いて扉を開けた。

風はビュオーツと音を立てて吹き込むと埃という埃を巻き上げ、そいつらをさらうように扉から出て行った。

「エナ！こっちへ来て！」

時計塔のどこにいても届くように大きな声を出した。

「こっちってどこよ！」

下の方から返事が返って来た。

「埃で前が見えなかったからよく分かんないけど、階段を登ったところだよ！」

「わかったわ！」

僕は通路の手すりをしっかり握って首を扉の外に出した。

長い鉄の棒が真下から右上に伸びている。短い棒は長い棒の下に隠れていた。

「ここ！文字盤の真ん中だ！」

中に戻り叫んだ。

するとすぐにエナが現れた。エナは扉の外を見て言った。

「すごいわね」

眼下には花畑とその先には僕らの街が見えた。僕らのカフェはどこだろうと目を凝らしたが結局分からなかった。僕らはしばらくそこからの景色を楽しんだ。

「そういえばバナハットはどこ？」

「すっかり忘れてた、探さない」と

「まだこの中にいるのかしら」

「分からないけどそうだといいいね」

「手分けして探しましょう」

エナは階段を降りて行った。

”バナハットー、出ておいでー” エナの声が時計塔に響き渡る。

僕は階段から上を見て回った。大きな芯柱からいくつも歯車や鉄柱が伸びている。歯車と歯車が噛み合う、大きい歯車から小さい歯車へ、短い鉄柱から長い鉄柱へ、鉄柱と歯車のくっついている面、大きな歯車の中心に開いた穴を鉄柱が突き抜けている面、どれも錆び付いていたがどこか躍動感の感じるものだった。

全てに目を通してバナハットを呼ぶ声に目的を思い出したとき、それを見つけた。

「このレバーで時計塔を動かしていたんだな・・・」

僕の前には大きなレバーが伸びていた。

「ねえ、やっと見つけたわよ」

僕がレバーを引こうかどうか迷っているとバナハットを抱いたエナがやって来た。

「そのレバー、この時計塔を動かすレバーじゃない？」

「たぶんね、でもきつと引いても動かないんじゃないかな」

レバーを見たエナも僕と同じことに迷っているのはすぐにわかった。

帰ろうか、そう言おうとしたときだった。

「うなーごー!!」

バナハットは突然声を上げて抱きしめるエナのお腹を蹴って腕から飛び出した。”痛っ”とエナが空いた手でお腹を押さえるのと同じ時にバナハットはレバーに体当たりした。

ーガコンッ、ゴゴゴゴ、ガラガラガラー

何か重たいものがはまる音がした後に真っ直ぐ伸びる芯柱が回り出す。

「ちよっと、これまづいんじゃない!？」

芯柱に連動して歯車たちが回り出す。

「うなごっ!」

時計を動かした犯人は走り出し階段を降りて行った。

ーガガガガ、ガラガラガラー

振動で錆を全身から落としながら歯車たちは回った。

「追いかけるわよ!」

僕たちはバナハットを追って階段を降りそのまま時計塔を飛び出した。

「うわっ! 危ないよお嬢ちゃんたち!」

僕とエナは男にぶつかりそうになりよろめいて転んでしまった。

「ごめんなさいっ」

エナが謝ると”気をつけなきゃだめだよ、俺が怖い人だったらどうすんの、ここは人通りが多いんだから”と叱って歩いて行った。

「・・・うそだろ」

僕らがあたりを見渡すとそこは花畑ではなく、大きな港だった。

「なにこれ・・・」

右手側には大きな貿易船とそこから積荷を降ろす船員たち、左手側には魚を売る商人、それを買う老婆、隙について魚を奪おうと目論むバナハット、もう一度船を見ればカモメが帆に止まり羽を休めている。

「どうなってんだ」

振り返るとそこにあの時計塔はなく同じほどの背丈の灯台が立っ

ていた。

そのさらに後ろには真っ青な青空を反射させる大きな海原が広がっている。

花畑と同じように地平線まで続く大きな海だった。

潮風の王国

「こらっ！ あっち行け！」

魚を狙うバナハットは魚商人に叩かれそうになり”うなゝっ”と声を上げ飛び退いた。

僕は自分の置かれていた状況に整理がつかずやや放心しているような状態だったが、エナの心の中の興奮は店を飛び出したときから未だに冷めていないようで、僕には何も言わなかったがスキップで鼻歌を歌いながら魚商人の前まで行き満開の笑顔で”ごめんなさい！ 悪気はないのよ”と言い放ち、傍らで物欲しそうに魚を見つめるバナハットを抱き上げスキップで鼻歌を歌いながら帰って来た。帰りのスキップはバナハットの重さでぎこちなく、鼻歌もその辛さやや途切れ途切れになっていた。

そうして僕の顔を見て言った。

「楽しそうじゃないわね」

「だってどこかも分からないところに迷い込んだんだよ？」

「あら、どこか分からないからわくわくするんじゃない」

「うなゝご」

「ほら、バナハットだって楽しいって言ってるわ」

この状況を知ってか知らずか鳴いたバナハットにエナは満足そうに言った。

「そうなこと言ったって帰り道が分からないことに変わりないでしょ・・・」

「まあそう言うなら帰り道を見つけてから遊ぶことにするわ」

”持ってた” そう言ってバナハットを僕に渡すとエナは両腕を組んで考え始めた。

潮風が腕の中のバナハットのヒゲを揺らす。

「時計塔を飛び出したら港で、振り向いたら時計塔じゃなくて灯台になってたのよね、なら簡単よ！ 灯台に入ってまた出たらいいわ

！」

” そんなバカなことあるもんか ” そう言おうとしたがエナは続けた。

「名残惜しいけど、さ！ 行きましょ！」

僕たちは灯台の根元まで来た。

中へ入る扉は開きっぱなしだった。当然か。

灯台の中は時計塔とは違い埃一つない綺麗な空間だった。振り向いて扉の外を見たが活気溢れる港が依然として広がっていた。海の潮の匂いは中に入っても変わらなかった。

「何が足りないのかしら？」

手がかりを探して僕たちは真新しい鉄階段を上った。

灯台の上の階は周りをぐるっとガラスに囲まれた部屋でその中心には大きなレンズとその後ろに大きな電球がある。そしてその横で何か作業する長い白髭の途中を紐で結んでいる背の低い老人がいる。

「うなーご」

バナハットの鳴き声に気づき老人はこちらを向くと声を上げた。

「なんだオメーら！ ここはガキが入っていいところじゃねーぞ！ 出てった出てった！」

「すいません！ でもちょっと！ 大変なことになってまして！」

「知らないね！ ワシかて仕事で大変なんじゃ！ 出てってくれ！」

老人にどやされあつという間に灯台を追い出された。僕らが立っているのはやはり港の石畳の上だった。しかし僕は老人の作業しているその脇に大きなレバーがあつたのを思い出していた。時計塔のものとはよく似たレバーだった。

「・・・だめね」

エナは肩を落とした。

「ねえエナ、あのレバー見た？」

「レバー？」

「うん、たぶん灯台を動かすレバーだよ、そのレバー時計塔にあ

ったやつによく似てた」

「それは・・・やるしかないわね」

「もう一回行ってみよう」

僕はエナを連れて灯台へ戻った。

「なんじゃ！まーた邪魔しにきおったか！仕事の邪魔なんじゃ！出てっくれ！」

「すみません！でも試したいことがあるんです！」

「だめじゃだめじゃ！忙しいんじゃ！」

僕と老人は口論を続けた、そしてその口論を止めたのはエナだった。

ーガコンツ、ゴゴゴゴ、ガラガラガラー

聞いたことのある音を立ててレンズと電球を乗せた台座が回り出す。エナはレバーを握っていた。

「カーッ！何しおるか！！」

「きゃっ」

老人はエナを突き飛ばすとレバーを元に戻した。

ガコンツと再び大きな音を立てて台座の回転は止まった。

「何なんじゃあんたら！何しに来た！？なんでガキに邪魔されにやならん！？」

「すみません！でもこれで元の世界に帰れるかもしれないんです！」

僕は必死に頭を下げた。

「元の世界だかなんだか知らんが子供の遊びに付き合っちゃいられねえんだよ！頼むから帰ってくれ！」

「・・・すみませんでした」

僕たちは灯台を出た。

しかしそこはまだ港だった。

帰れないと知ってしまったエナの興奮は見る影もなかった。

”どうしたらいいんだ” 途方に暮れて灯台にもたれ掛かって座っ

ていると一人の男の子がやって来た。

「困ってるでしょ、君たち」

顔を上げて声の主を見ると、7歳ほどの男の子だった。ベージュのズボンに着古した色のワイシャツを着ている。

「ええ、困ってるわ」

エナが言うと少年は笑った。

「だと思った！それともう一つ、君たちこの国の人じゃないね、どこから来たの？」

「え・・・？」

「だってなんかこの国の人とは雰囲気が違うから」

「すごいねあなた、私たち異世界からやって来たのよ、たぶん」

「異世界？違う国とは思ったけどまさか異世界なんてね、ロマリアあたりかと思ったよ」

そう言うと少年は僕らの前にあぐらをかいて座り込んだ。

「ここはねハミルトン王国って言うだ、ハミルトン王が統治する自由の国さ！」

少年は誇らしげに言った。

「観光なら南のブドウ園に行ったらいいよ！あそこは美味しいブドウとパイを出してくれるんだ！それか食いしん坊じゃないなら丘の上の展望台に行ってみなよ王国の一番端まで見えるんだ！晴れてただけどね」

それから少年はあっちこっちと指差してときには身振り手振りを入れて僕らに話しをした。

「ごめんなさい、嬉しいんだけど私たち、帰り道を探してるのよ」エナが少年の話を遮った。しかし少年の顔が曇ることはなかった。

「帰り道がわからないのかー、異世界だもんな・・・あ！そうだよ！それならここから西に行ったところにあるハミルトン城に行きなよ！ブドウ園行くよりか近いから！」

「お城だって？そこで何か分かるの？」

「分かるよ！言い切れないけどね。城に着いたらまず外門の憲兵

に”ハミルトン王子に会いたい”って言うんだ、”用件は？”って聞かれるだろうからそしたら”岩清水を見つけた”って言って。王子様は特別な水を探してるらしいからそれを持ってるフリして王子様に会うんだ。ほら、この瓶上げるから適当に水入れて持ってたって大丈夫！バレても捕まりやしないよ、王子様優しいから！事情を説明して助けてもらうんだ」

少年はポケットから小瓶を出してエナに渡した。

「それ、ブドウのジャムが入ってた小瓶なんだ、いらないからそのままもらっていいよ」

「あ、ありがとう、でもあなたなんでそんなにお城のこと知ってるの？詳しいようだけど」

「えっとねえ、それは・・・あそうだ、昔お城の近くに住んでたんだよ！で、よくお城に入ってく人見てたから！」

なんとなく嘘っぽく聞こえたができることなんて他にないので素直に従うことにした。

「僕からありがとう、この恩は忘れないよ」

「気にしないで、おせっかいが好きなんだ」

そう言うと少年は立ち上がり港から大通りへ走って行った。

エナはジャムの小瓶の蓋を開けると堤防の端まで歩いて行きひざをついて海面に手を伸ばし海水を汲んだ。

「これで大丈夫かしら？」

「どうだろう、とりあえず誰かにお城の方向を聞かなきゃ。西って言われてもコンパス持ってないしね」

僕らは近くを歩いてた女の人に城への道を聞き歩き出した。

気がつけばバナハットは僕の腕の中で眠っていた。

歩き出した道は偶然にも少年の走って行った通りだった。

「まだ陽は高いわね、夜までに着ければいいけど」

海からの風が潮の匂いを乗せて僕らの背中を押した。

憲兵と門番

王国全体は丘のようになっていて港から離れれば離れるほど坂が急になっていった。

バナハットを抱いて長い坂を登るのはとても辛く”自分で歩けるだろ”と何度か歩かせてみたが、バナハットはその度に「うなー」と情けない声を上げるのだった。

仕方なく交代でバナハットを抱き大通りを進んで来た僕らの前にハミルトン城の外門が現れたのはすっかり夕方になってからのことだった。

「やっと着いたわね、せっかく冒険が始まるかと思ってたのに汗しかかいてないわ」

港から城まではこの長い一本道で繋がっていて、飛び出してきた灯台は遠くにあるのがやっと見える程度になってしまったが、遮られるものなく吹き込む海風のおかげで港からずいぶん離れたこの丘の上でもはつきり潮の匂いが分かる。

「ちよつと、ちよつと休もう」

僕は大通りと交差する道を挟んで城の外門と反対側に座り込んだ。

「ブドウ園に行ったらきつと夜になってたわね」

エナはそう言うバナハットを降ろして僕のとなりにしゃがみ込んだ。

「明日は筋肉痛確定だね」

「自分の家で休めればいいんだけど・・・ジョージさんどうしてるかしら」

エナは門を見つめて言った。大きな門の両側には二人の男が立っている。

「あの門の前、二人いるけど、どっちがあの子が言ってた憲兵かな」

「『ハミルトン王子に会いたい』って言えばいいのよね？」

「うん、でもどっちが憲兵か分からないよ」

「二人とも服装が違っていてことはやっぱりどっちかが憲兵で、どっちかが門番ってことに間違いはないわよね」

僕は右側の男を見ては”憲兵ってきつと体格がいいに決まっているわ、だからこっちは左と比べてちよつと太ってるし門番なんじゃない?” 憲兵って言う方からは王様の警護とか反逆者の逮捕とかするんでしょ? そしたら左の人は痩せ過ぎてると思うな、きつと右が憲兵だよ”

左の男を見ては”門番って槍を持っていなかったっけ? 左の人は剣だから多分左が憲兵だよ” 門番は門を守るだけなんだから動きやすい必要なんてないわよ、だから甲冑着てるなんてきつと左が門番ね”

と言合い混乱を深めていった。

僕らがどちらに声をかけたらいいか迷っているとバナハットが声を上げた。

「うなーご」

「どうしたのバナハット? あなたもしかしてどっちが憲兵か分かるの?」

「うなっ」

バナハットはまるで”知らないことはないぞ”といった顔をしている。

僕らが驚き顔を見合っているとバナハットは門の方に向かって歩き出した。小さな背中が大きく見えた瞬間だった。

門の前まで行くと反対の男には脇目も振らずに右側の男の足元まで歩いて行きこちらを見て”うなーごー”と鳴いて僕らを呼んだ。なるほど男は足元のバナハットには視線すら落とさない、あの堂々たる姿勢、きつと右が憲兵で間違いない。

「ここまで抱いて登ってきた甲斐があったわね! 行きましょ!」
僕らは憲兵の元へと走った。

「なんだお前ら、何しに来た?」

「ハミルトン王子に会いたくて」来ました！」

「用件は？」

「はい！」王子が探しているという岩清水を見つけました！
”」

あの子の言った通りだ、すごいぞバナハット！僕は憲兵の足元のバナハットにそう思いを乗せた視線で褒め干切った。

あとはこの憲兵に連れられ王子のところまで案内してもらうだけだ。

僕はもう一度憲兵の顔を見た。優しそうな顔だ。それに比べて向こうは・・・なんてイカツイ顔なんだ！まああの強面こわもてな顔で門に寄ってくる連中を威嚇するんだろうからやはり向こうが門番で間違いない。さあ憲兵さんよ！僕らを王子のところに案内してくれたまえ！

「イワシミズ？どれ、見せてみる」

憲兵は片手を突き出し、手を広げた。

（え？）

（ちよっと！話が違うんじゃない？！？どうするのよ！？）

（どうするって・・・み、見せなきゃ入れない雰囲気だけど・・・

）

（見せるですって！？もしバレたらどうするのよ！）

（じゃ、じゃあどうするのさ！）

まさか！僕は憲兵の足元を見た。・・・バナハットの姿はない。嘘だろ・・・？僕は門の反対側の男の足元を見た。デブ猫だ。しかもこちらと目を合わせないように背中を向けてやがる。

（あ、あいつ！恩を仇で返しやがったな！）

（最悪！どうするのよ！）

「おい、何をこそそしている」

「っはい！すすす、すいません！人違いででしたっ！えっと！あちらの方でした！失礼します！」

僕がエナの手を引いて行こうとすると男はエナの手を？んで止めた。

「何しにきた、もう一度言ってみろ」

「っはい！いいい、岩清水を持ってきた！」

「見せてみろ」

「えと、この水はですね！とてもあれでして！陽に当たると消えてしまうので、見せられません！」

「・・・、見せてみろ」

「え！？いや！だからですね」

「見せろ」

「みみみ、見るだけですよ！？」

”見せてあげて” 僕はエナに言った。

エナはポケットから海水の入った小瓶を出して見せた。

「こっちに渡せ」

「だっ、だめよ！」

「なんで」

「っそ・・・それは・・・それは！この水！ちよつとでも揺らすと爆発するの！危ないわ！」

男は呆れた顔でため息をつくと一転してエナの手から瓶をもぎ取った。

「ちよつと！返して！」

男はあつという間に瓶の蓋を開けてしまった。

「これ、ただの塩水じゃねえか」

僕は『逃げよう』とアイコンタクトをとって走り出した。

「そいつを捕まえろ！！」

僕は逃亡むなしく捕まってしまった。

男（門番）は僕らを城の兵に引き渡し「地下牢に入れておけ」と命令した。

兵に連れられ牢屋へ行くまでエナは離せ離せと暴れていたが僕は諦めておとなしくしていた。

ただ、兵に連れられ門をくぐるとき”なんだおまえー、おでぶち

やんだなー、どこからきたんだー？ かわいいやつだなー！”とイカツイ顔の男（憲兵）に撫で回されていたバナハットの冷や汗をかきまくっているあの顔を、僕は忘れはしない。

王子様に抱かれた猫

鉄格子の向こう、蝋燭に照らされた階段の先、それ以上のことは分からないが城内でパーティーか何かをしているのだろう。耳を澄ませると聞こえてくる軽快なジャズの音、トランペットにサクソ、ピアノ、ベース、ドラム、クラリネット、トロンボーン、色彩豊かな楽器たちが奏でる音は牢屋の中を少し、少しだけ明るくした。

僕とエナは同じ牢屋にいられた。しかしこの牢には薄い毛布が一枚あるのみで冷え込んできた夜の寒さにはとても耐えられない。僕は二人で毛布を被り牢屋の隅で身を寄せ合った。

「上でパーティーしてるみたいね」

「そうだね」

「王子様も出てるのかしら」

「たぶんね」

「バナハットどうしてるかしら」

「さあね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「ニックっていい匂いがするのね」

「え？」

「なんだか眠たくなってくるような匂いよ」

「そうかな」

「そうよ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「ニックって名前で呼ぶの今が始めてよね」

「そうだね」

「ニックは私のことエナって呼んだことあったかしら」

「何回か呼んでるよ」

「あら、そうだった？」

その頃バナハットは走っていた。

執拗に撫で回す憲兵の手から脱したのは一時間ほど前のことだ。

バナハットは門の傍に停めてあった馬車の馬の背中に飛び乗り、馬車の屋根に飛び移り、そこから城の堀に飛び移った。

堀の内側へと降りられる場所を探して堀の上をぐるっと一周してみたら降りられそうな場所はどこにもない。そのうえ戻って来てみれば登るときに使った馬車もない。バナハットは完全に堀から降りる方法を失った。

バナハットは焦っていた。しようと思っただけではないが、この世界に二人を連れてきた原因となったのも自分、間違えて二人を牢屋送りにしたのも自分、そして長い坂を抱いて登ってもらった恩もある。

絢爛な灯りを燈す城内からは軽快なジャズが聞こえている。しかしバナハットには立ち尽くすことしかできなかった。

「おい、交代だ。門を開けるぞ」

見降ろすと二人の男が門の外側の二人に向かって言っている。

「やっとか！ いやー疲れた！ ありがとう！」

そう言ったのはあのとときのイカツイ顔の憲兵だ。

そして一緒にいる門番も言った。

「今日は変な連中がいたんだ、他にもバカなやつがいると悪いかな、一応注意してくれよ」

そうして二人は交代にやって来た男たちとすれ違った。

「おつかれさん」

「ああ、頑張れよ」

言葉を交わすと二人は内側から門を閉めた。

「今夜はロマリアのお偉いさんが来ててパーティーだろ？ 仕事も終わったことだし、一杯やろうぜ！」

「言われなくたってそのつもりさ！ 厨房のスコットがいるだろ？」

あいつがさ『本当はパーティーに出すやつなんだけど、一本くらいならバレないだろうし分けてやるよ』って言ってくれてな！こっそり牛舎に隠してあんだよ！」

「おお！いいねえ！貴族のワインだろ？初めてだよオレ！うめーんだろーなー！」

二人は肩を組んで城へと歩いて行く。

バナハットは今しかないと思った。

「うなー！うなー！」

力いっぱい叫んだ。そしてその声は男に届いた。

「ありゃ？この声・・・」

談笑にほころんでいた憲兵の顔は元のイカツイ顔に戻り声のする方を注視した。

「・・・あ！やっぱりおまえか、おでぶちゃん！そんなところで何してんだ？」

バナハットを見つけた憲兵はまた笑顔に戻って、バナハットのいる堀の下まで歩み寄った。

「なんだおまえ、おりられないのか？ほら、受け止めてやるよ」

そう言うと言は両手を広げた。

バナハットは少しためらったがのんびりしている暇もない、勇気を振り絞って踏み切った。

「うおっ」

男は一瞬予想外の重さに声を漏らしたが見事バナハットを受け止めた。

「大丈夫だったかいおでぶちゃん？」

バナハットは頭を撫で回されたが今は急がなければならないことがある。思い切り腹を蹴って腕から飛び出し、男を尻目に真っ直ぐ城へ走った。

「まってくれよ！おでぶちゃん！」

悲しみに瞳を潤ませ叫ぶイカツイ顔の男に門番は言った。

「そういやお前の嫁さんもでぶだったよな・・・」

バナハットは得意気だった。

城に入った今、あとは王子を見つけてしまえばなんとかなると思
っていたからである。

バナハットは料理の匂いとジャズの音を頼りに誰にも見つからぬ
ようパーティー会場へ進んだ。そして一番近いテーブルの下に身を
潜め覗った。

バナハットは苦しんだ。

七面鳥の丸焼きに大きなハム、でっかいパイにソテーされた魚、
たくさん料理がその匂いでバナハットを誘惑したからである。も
し理性を失いテーブルの下から飛び出し料理に飛びつこうものなら
あつという間につまみ出されてしまう。

そのうえテーブルの下を渡り歩きながら顔も知らぬ王子を見つけ
ないといけないのである。

不安に押しつぶされそうになりながらも会場を歩き回っていると
バナハットは一人の少年を見つけた。

上手く近くのテーブルまで移動できたバナハットは少年の靴下を軽
く噛んで引っ張った。

「ん？なんだ？」

少年は足元に目を落とした。

「おまえあんときの！二人はどうしたんだ？」

バナハットの見つけた少年はエナとニックに城へ行くよう勧めた
少年であった。しかしあのときとはまるで雰囲気が違う、真っ赤な
半ズボンに白い長靴下、同じく真っ赤な胴衣の上には薄い黄金色の
タブレット、その様相はまさに『王子様』であった。

「うなー！」

バナハットが（どこにいるかは分からないが）王子をエナとニッ
クの元へ案内しようと走り出そうとしたとき王子はバナハットの尻
尾を？んだ。

「野良猫が紛れ込んだと思われたらどうするんだ！」

そう言うと少年はバナハットを抱き上げた。

「なんだかよく分からないけど僕が行かないとだめなんだろう？」

「うなーご！」

”分かった”短く言うと王子は会場を飛び出した。

王子様の服はなんだかヘンな匂いがするな、とバナハットは思った。

大脱出

―ガチャリ―

階段の上の戸の鍵を開ける音が薄暗い地下牢に響く。

カツカツと階段を降ってくる音が僕とエナに緊張を誘う。

「誰か来るわ」

城の兵士が僕らを連れ出しに来たのだろうか、だとすれば僕らは・
・縁起でもない考えが脳裏をよぎる。

足音は鉄格子の向こうで止まり、そのシルエットを蝋燭がぼんやりと映し出す。

兵士にしては背が低いようだ、おそらく子供だろう。両腕で大きな袋のようなものを抱えている。

「誰？」

エナは不安そうに尋ねた。

”よいしょ” 小さく呟くとその子は大きな袋を床に降ろした。冷たい床に降ろされたそれは蝋燭にぼんやり照らされもぞもぞと動き出す。どうやら大きな袋ではなく生き物のようだ。

そいつはもぞもぞ、もぞもぞ、とゆっくりこちらへ近付いてくる。

「何あれ、キモチワルイ」

エナは僕の後ろに隠れた。

謎の生き物は鉄格子の前まで来ると格子の隙間から中へ入ろうと身をよじっている。

エナは怯えきっていて僕の後ろから動こうとしない。

「やだ、こっち来ようとしてるわ・・・」

僕はよく目を凝らしてそいつを見た。非常に短い足があるらしい、四足で歩いているのが分かる。それと少し太いようだが尻尾も持ち合わせているのが分かった。短い足を踏ん張り必死で中へ入ろうとしているが動かない。どうやら格子に挟まったらしい。

「お前・・・バナハットか？」

僕がバナハットと呼んだ瞬間そいつはビクツを身を震わせ小さく申し訳なさそうに鳴いた。

「うなー」

その声を聞いた途端エナは僕の後ろから出てきた。

「バナハットなの？」

「うなー」

「心配してたのよ！」

エナは格子に挟まったバナハットの元まで行くと前足を掴みゆっくり引っ張り入れた。

「うなーうなー」

エナに抱き抱えられたバナハットは今にも泣き出しそうな顔でエナの頬を舐めている。

バナハットを責める気持ちはすっかり消えてしまった。

「うなー」

抱かれた腕の中からバナハットは腕を伸ばし僕の腕をつついた。

「大丈夫、もう怒ってないよ」

「うなっ」

僕はその短い手を握って握手した。

僕は改めて鉄格子の向こうの人影に目を凝らす。

「君は誰？」

「話は後だよ、ボクが君たちを逃がしたって知られちゃ怒られちゃう。」

その子は牢屋の鍵を開けると”付いてきて”と短く言った。

階段を上り明るみに出たときその後ろ姿を見て最初に気付いたのはエナだった。

「お、王子様!？」

大声を出されたエナに王子は振り向くと人差し指を立て唇に当ててみせた。

「しかもあのときの!!」

顔を見たエナは王子の行為などを理解するともなく再び声を上げる。

たしかにこの王子はあのとときの、灯台で途方に暮れていた僕らにこの城へ行くよう指示をしてくれた少年だ。

「ほんとだ！なんでここに！？しかもその格好！」

「うるさいってば！！静かにしてって！！！」

王子が大声で僕らを怒鳴りつけたときその声を聞いた兵士がやって来た。

「どうかしましたか王子・・・って！そいつら！！」

「やばっ、逃げるよ！」

僕たちは王子の後を追って走り出した。

「待て！脱獄者め！」

後ろから追ってくる兵士を撒くために廊下の角を曲がり、階段を上り、また角を曲がり、階段を降り、必死で走った。”こっちだよ！”王子の後を追って僕らは厨房へ飛び込みなんだと騒めくコックたちの間を縫い勝手口から城の外に飛び出した。

「あそこだ！あの牛舎に隠れよう！」

王子の指差す先の牛舎に僕らは飛び込んだ。

「「「「「あ「「「「「」」」」」」」

思わず声を漏らす。僕らが飛び込んだ牛舎には木箱を椅子代わりに使い楽しそうにワインを飲む、憲兵と門番の姿が。

「お前ら！あんときのサギ師！」

「あんたはあのときの頭のカタイ門番！」

「王子様まで！」

「イカツイ顔のやつも！」

「おでぶちゃん！！！」

「うなーごー！」

それぞれがそれぞれに声を上げたが皆一様に驚いていた。

「王子様！なんでそんなやつらと一緒にいるんですか！？」

門番は立ち上がり僕とエナを指さして言った。

「こいつらやばいですよ！頭のイかれた連中ですよ！？」

「イかれたって何よ！突然人を牢屋に押し込めるようなイかれた人に言われたくないわ！」

「だまれサギ師め！王子様！こいつら岩清水なんて言って王子様にただの塩水渡そうとしてたサギ師なんですよ！」

「この人たちはサギ師なんかじゃない！ボクが呼んだんだ！」

「王子様が！？で、でもそいつらは！」

「そんなこといいから！追われてるんだ！かくまってくれ！」

「かくまってくれて！嫌ですよ！サギ師をかくまったなんてバレたら！」

「だからわたしたちはサギ師なんかじゃないって言ってるでしょ！」

「つていうかお前たち、そのワインなんだ？」

王子は二人が持っているワインに気がついた。憲兵の足元にはボトルまで置いてある。

「「ぎくっ」」

「もしかしてお前たち、パーティー用のやつを・・・」

「ち、違うんですよ王子！こ、これはスコットのやつが！」

「うるさい！僕らをかくまう気がないなら僕らが捕まった後で父さんにお前たちがパーティー用のワインを盗んだって言うぞ！」

「王様に！？そんなっ！そりゃあんまりですよ！」

「知るか！で、どうするの！」

「わ・・・わかりましたよ。その干し草が積んである後ろに隠れて下さい」

僕らは急いで積み上げられた干し草の影に隠れた。

僕らが隠れるとすぐに牛舎の戸の開く音がした。

「お前ら、ここに脱獄者が来なかったか？16, 7歳くらいの男と女なんだが。それとなぜか分からぬが王子も一緒なはずだ」

「脱獄者に王子ですか？さあ知りませんねー、俺たちはここで牛

の世話しとったもんですから分かりませんが」

「そうか、ならいいんだ。もし見つけたら言いに来いよ」

戸の閉まる音がして、イカツイ顔の憲兵が顔を覗かせた。

「もう行きましたよ、大丈夫だったかいおでぶちゃん？」

「ありがとう、助かった。ちょうどいいしもう少しここにいさせてもらうよ」

「どうぞどうぞ、脱獄者の肩持ちちまったんだ、俺たちも同罪さ。せいぜい捕まんないで下さいよ」

門番と憲兵は揃って肩を落とした。

”座って” そう言うと王子は僕とエナを干し草の上に座らせて僕らを城に呼んだ理由について話始めた。

牛舎の中は干し草の乾いた匂いとワインから立ち上る鮮明な葡萄の匂いで不思議な香りを漂わせていた。

小さな王子の大きな決意

「へー、この猫バナハットっていうのか、バナハットがいなかったら君たちが捕まってるなんて分からなかったよ。」と言っても捕まってるんじゃないかと牢屋を覗きに來てみたらほんとに捕まっていただけなんだけどね。」

エナの腕から憲兵の腕に渡りしつこく撫で回されているバナハットを見て王子は言った。

王子はバナハットが城のどこにエナと僕が捕まっているのか分からないのを悟ると勘を働かせて地下牢へ僕らを迎えに來たらしい。

「まあそんなことは問題じゃないんだ、しばらく時間もありそうだし二人をここに呼んだ訳を話すね」

そう言って王子は話始めた。

干し草とワイン混じりの不思議な匂いはもう鼻が慣れてしまったのか気にならなくなっていた。

「ボクが城にいるときはいつも世話係が後ろを付いて歩いて來てね、いたずらはもちろん少しでも勝手に遊ぼうとするとすぐに怒鳴りつけるんだ。それこそボクがトイレに行くときだってドアの前で待ってるんだよ。それだけでも退屈なのに、日曜以外は毎朝五時に世話係が着替えを持って起こしに來て午前中は外国語四つに政治、經濟、歴史、午後は馬術にバイオリン、ダンス、劍術。ご飯を食べるお風呂に入って後は寝るだけかと思いきや寝る前には統治論だの霸王論だのなんて本を読まされる。日曜は日曜で遊ぼうとしたって城の中には遊び相手もないし、世話係は城の外に出るのを許しちやくれないし、父さんは休みなんてないみたいで日曜も大臣を連れて外国へ行ったり、母さんは体が弱いから遊ぼうとしたってトランプ以外にできることはないし、こうなったらもう城を抜け出すしかないでしょ?」

王子は僕らに相槌を打つ暇も与えず話を続けた。

「初めての脱出は大変だったよ、何より庶民の服を手に入れるのが。まあそれを話すと長くなるから今はやめておくね。そのときボクは初めて式典以外で城に出た、しかも一人で、おまけに好きなのところに行ける状況。歩き回って街を見て、父さんの評判を聞いて、ぼくはあっという間にこの国、父さんが作ったこのハミルトン王国が好きになった。ボクは毎週バレないようにこっそり城を抜け出した。父さんは川に新しい橋を架けたり、森を開いてブドウ園にしたり、港には灯台を作った。国のみんなが父さんに感謝しているのが分かった。国王の義務だなんだって遊んでくれないような父さんだったけどボクは城の外へ出たおかげで父さんが好きになったんだ。でもそれも長くはないかもしれないんだ・・・」

王子はうつむき言葉を止めた。

エナが”どうしたの？”と聞くと少し言葉を溜めて口を開いた。

「父さんは病気になったんだ。医者が言うには不治の病でこのままじゃ近いうちに死んでしまうって・・・。いろんなところから医者呼んで診てもらったけれどみんな口を揃えてそう言っていたよ。ボクは城の外で父さんを助ける方法をさがした、そして一つの噂を聞いたんだ。『この世のどこかにどんな傷や病も治す”岩清水”と呼ばれる水があるらしい』って、城の兵を集めて国中を探させようとしたけど父さんはそれを許さなかった。『国王が弱ってるなんて知ったら反逆者や敵国が動き出すに決まっている』そう言われたよ。しょうがないからボク一人で探し続けた、でも駄目だった。そんなときに君たち二人が現れた！異世界の人の力があればきっと見つかるに違いない！そう思った！ボクはまた父さんに国を守って国のみんなを幸せにして欲しいんだ！お願いだ！手伝って欲しい！岩清水さえ見つかったら二人が家へ帰れる方法を今度は国を上げて探すように父さんに言うから！」

王子が話を終えたとき憲兵と門番の二人はすっかり酔いの覚めた顔で唇を囁んでいた。

エナは王子の頼みを聞くと立ち上がって言った。

「いいわ、手伝ってあげる。でも、自分の帰り道くらい自分で見つけるわよ」

始めの一步

「じ、自分で見つけるって！それができそうにないからここに来たんじゃないか！」

僕は発言の撤回を求めてエナの腕を掴んだ。

「ちよっと！放してよ！私、今の話を聞いて分かったんだから！」
エナは僕の手を振りほどいた。僕は気持ちを落ち着けてエナに謝った。

「ごめん」

「いいわよ、気にしてないもの」

「・・・で、何が分かったの？」

そう聞かれたエナは胸を張って答えた。

「きつと私たちの力を必要としている人がいるから私たちはここに来たのよ！分かる？ 私たちは力を貸しに来たのよ、貸されに来たんじゃないわ！」

「そ、そんなのって・・・」

言い返す言葉を探して口をつぐんでいるとエナは王子の方に向き直って言った。

「あなたってまだ十歳くらいよね？ 子供相手に王子様王子様ってなんだかへんよ、名前は何？ 一緒に行動する仲間になるんだもの対等じゃなくちゃ！」

王子は僕を気にかけてこちらを一瞥したがエナに握手をした。

「そうだね、ありがとう。僕はピクセル、ピクセルⅡハミルトンだよ。よろしく」

「ピクセルね、よろしく。エナ・エイラよ」

ピクセルは握手を終えると少し申し訳なさそうに僕にも手を伸ばしてきた。

「ニック、ニック・ユンカース。よろしく」

僕がその手を取って自己紹介をするとピクセルは僕にも自己紹介

をした。

「うなーご」

バナハットが鳴いたのを聞くとピクセルはバナハットにも握手し
て言った。

「ピクセルだよ、よろしくねバナハット」

「うなーご」

一通りの挨拶が済んだのを見るとエナは胸を膨らませて言った。

「やっと始まるみたいね、私たちの冒険！」

冒険の始めとなる第一歩は三人と一匹でこの城を脱出することだ。
しかしこの城から出るには僕らが入ってきた正面の門しかない、僕
らは作戦を立てた。無論ワイン泥棒たちにも協力してもらう。まず
イカツイ顔が城内へ入り”脱獄者がいたぞ！”と叫び注目と兵士を
集める。その隙に門番は交代と称して今門の警備をしている二人と
入れ替わる。注意が逸れて門番も交代で入れ替わり門外への脱出の
道が完成したところで僕らは脱出する。単純明解な作戦だ。

「そういう訳だから頼んだよ」

「え？え！？ちょ、ちょっと待って下さいよ！オレは！？兵士の
注目を引きつけた後は！？どうしたらいいんです！？」

「あーそうだな、考えてなかった。んー見失ったって言えば？」

「そっそんな！無茶苦茶ですよ！」

「俺はどうなるんです！？交代しようって言ってその後は！？ま
さか朝まで門番なんて言わないですよね！？」

「おお、解決だね。それでいこう！」

「勘弁して下さいよ・・・」

うなだれる二人にピクセルはワイン瓶を突き付けて牛舎から追い
出すと僕らに言った。

「部屋に城の外へ出るときの服置いてあるの忘れてた！この格好
じゃまずいから着替えて来る！着替えたらずぐ行くから先に行っ
て！」

「着替えるって、そんな時間ある？」

「大丈夫だから！早く行って！」

少し不安にも思ったがワイン泥棒達を行かせてしまった後なのでやむなくピクセルと別れ僕は門の方に向かった。

門の傍の茂みに隠れると少しして城内の方から声が聞こえてきた。

『脱獄者がいたぞ！こっちだ！』

「ああ・・・なんてことだ、上手くいってるのか・・・」

門番は城内から聞こえる憲兵の声を聞くと肩を落としてぼやいた。頼りない声で”じゃ、行ってくるよ”と言い残し軽く右手を振って門の方へ歩いて行った。

「おい、交代だ、城の中の声聞こえただろ？脱獄者が出たらしい、ここは俺が交代するから中の方へ行ってくれ」

「ホントか？分かった、交代しよう」

あっさりと交代できたことに門番はため息を付いて門を開けた。

僕とエナは交代した門番の二人が城へ歩いて行くのを見届けてバナハットを連れて門をくぐった。

「ありがとう、感謝してるわ」

エナに礼の言葉をもらった門番は”頑張れよ”と感情のこもっていない返事をして門を閉めた。

「門の前で待ってるのも危ないし、ピクセルが来たら僕たちは灯台へ行たって言って下さいね。僕ら今から灯台に向かうんで」

僕は門番に伝言を頼んだ。

「ああ、分かったよ、開けたかないけど王子様が来たらちゃんと門を開けてそう伝えておくよ」

僕らは門番に手を振って港から続くこの坂道をくだり始めた。すっかり忘れていた潮風の匂いが坂を登って来る。

遠く坂の下に見える灯台を見てエナは言った。

「あそこでピクセルに出会ったのよね」

「うん」

「ピクセルもちゃんと抜け出せるわよね？」

「うなーご」

僕の代わりに返事をしたのはバナハットだった。

自信のない僕に代わってバナハットはエナを不安にしないよう答えたのだ。

僕はバナハットの頭を撫でた。

灯台の白髭

僕らが城を出発したときはまだ暗かったが夜の街並みを抜けてこの灯台の前でピクセルを待ち始めると水平線の先が少しずつ明るくなってきた。王国も少しずつ眠りから覚めてきている。

僕らとピクセルの差は”ピクセルが自室に戻り着替える”分だけのはずだが振り返って見ても視界にその姿はない。

ピクセルに何かあったのは言うまでもなかった。

「ああいう服って脱ぐときも時間がかかるのかしら・・・」

「まさか」

「そうよね・・・」

きつとピクセルは途中で城の誰かに見つかって引き止められてしまったのだ。なんとかしなければ。

僕らはそう考えたがピクセルを迎えに行ったところで彼を連れ出す手立ても自信もない。第一、濡れ衣とは言え脱獄者が出ているのだ、城の警備が強化されているのはもちろんここに留まっていることさえ危険に違いなかった。

「どうしたらいいのかしら」

僕らは灯台に寄り掛かるように座り込んだ。

「分からない・・・けど、牢屋に連れ戻されるのだけは避けないと」

それきり僕らの間には会話はなく、バナハットだけが僕らを励まそうと”うなあ”と鳴いていた。

「なんじゃお前ら、また来おったか」

しわがれた老人の声がして顔を上げるとつい昨日この灯台の中で出会った長い白髭を紐で縛った老人が立っていた。怒鳴り声を上げないのは表情から察するに僕らに呆れているのだらう。僕は再び下を向いた。

「この灯台がそんなに好きか？なんでまたここにいるんじゃ」

思えばこの世界に来てから長い坂を登ったり兵士から逃げて走ったり、もう足が棒のようになって動かない。最後に食事をしたのもエナと店を飛び出す前だ。疲労と空腹が老人の問いかけに答える氣力を奪っていた。

「なんじゃなんじゃ、今度はだんまりか」

答えられることのない老人の声にしびれを切らし声を上げたのはエナのお腹だった。

”ぐぐう”と大きな音に老人はポカンとしていてそれを聞いたバナハットは声の主が分からず不思議に周囲を見回している。うずくまっているエナの横顔を見ると頬を恥じらいに赤く染めていた。

「腹が減っておるんか」

”ぐぐう” 老人がエナに言うともたも彼女のお腹が返事をした。

バナハットは声の主を探して”うなー”と鳴いている。エナの顔は爆発しそうな程赤くなっている。

「待っておれ」

老人はそう言うところかへ行ってしまった。顔を上げるとどこかへ歩いて行く老人の姿、城へ続く通りにも目をやったがやはりピクセルは現れない。エナは顔を赤くしてうずくまっている。

（鳴ったのが僕のお腹じゃなくてよかった・・・）

「付きまとうだけの理由があるんじゃろうな、聞かせてもらおうぞ」
老人は帰ってくるなり僕らに40センチほどのバスケットを手渡した。

「食ってからでいいから」

蓋を開けるとたくさんサンドウィッチがきれいに並んでいる。

「ありがとうございます」

お礼を言うと老人は

「三枚は残しておいてくれんか、わしの昼めしも一緒なんじゃ」

僕とエナは二枚ずつサンドウィッチを食べて一枚をバナハットにあげた。老人にはここに来るまでの全てのことを話した。

「そりゃぁお前ら、この猫のせいだな」

「「え？」」

「そっちの世界じゃどうかは知らんがこっちの世界じゃ昔から猫には時間を超える力じゃったり、人に化ける力じゃったり、それこそ別の世界へ飛んじまうなんて力じゃったり、いろんな特別な力があるなんて言われておるんじゃよ。まあ今じゃそんなこと言うのもわしらぐらいの年寄りだけになっちまったみたいじゃがな」

「そうだったんですか」

「それで？王子様が来ないんじやろ？どうするんじや」

「・・・・・・」

「迎えに行かんのか？」

「・・・・・・」

「一緒に探しに行くって決めたんじやろ？」

「・・・・どうやって城から連れ出したらいいか分からなくて」

「なんじゃなんじゃ、情けない！若いもんが二人も揃って友達一人助けられずにいるんか！」

「・・・・・・」

僕とエナは落ち込むしかなかった。

「ええい情けない！ならわしにいい考えがある！聞け！」

老人は僕らを一喝しとんでもないことを話始めた。

それはもうとんでもない話だ。

「せっかくすんごい猫を連れておるんじやからそいつを使うんじやよ！！そのすんごい力を！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2176y/>

大きな猫のバナハット

2011年11月27日16時57分発行